ペルソナ4 やはり俺がコミュを築くのは間違っている。

雪乃 宿海

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Ｐｅｒｓｏｎａ４と俺ガイルのクロスオーバーです。

ひょんな事から八十稲羽市に移り住むことになった比企谷八幡が、不器用ながらもコミュを築き仲間と共に八十稲羽市の奇妙な事件に巻き込まれたりしたりしなかったり。

八幡の視点で進めていきますが、特にチートにするつもりもないです。八幡がキャラ崩壊してる迄ある（かもしれない）ので生暖かい目でみまもってくれたら助かります。

駄文故、ご指摘を頂くこともあるかと思います。

その都度直していきますので、遠慮なく（優しく）お願いします。

では八幡の奇妙な１年をお楽しみいただけたらと思います。

目次

1日目 …… 1
2日目：1 …… 4
2日目：2 …… 7
3日目 …… 11

1日目

4月11日：曇りのち雨
電車に揺られること3～4時間
愛しの千葉を離れ、新たな暮らしを始めるために俺は某県の八十稲羽市に向かっている。
マッ缶を片手に外を観る。
「山しかねぇな…」
一口煽った後の一言は、その後の時間を長く感じさせるには十分だった。
口の中にじんわり広がる甘さと共に眠気が俺を襲う。

…なく…ば…き…まもなく、八十稲羽駅」
目が覚めると、目的の駅に着くみたいだ。
重い体を起こし、電車を降りる。
「久しぶりに来たけど、やっぱ…何もねぇなぁ…」
降りてすぐ目の前に広がる景色が山しかないのだから、そんなセリフしか出てこない。
自分でもよく分からない呆れるような感覚を、ただでさえ重い荷物にのせて駅を出た。余計に重たく感じる。

改札を通れば叔父さんが待っているはずなのだが…
やはり比企谷家、時間にルーズなのは変わらないか
「仕方ない、マッ缶でも飲んで気長に待つか…」
自販機の前に立って俺は地に膝を付けた。
土下座じゃないよ。ココ重要。

「マッ缶がねぇじゃねぇか」

仕方なく宇宙人でお馴染みのコーヒーを飲むことにした。

しばらくすると緑色の車が駅の駐車場に入ってきた。
出てきたのはダンディなおじ様と、娘と思しき幼女で、娘の方は不安そうに父の袖を掴みながらあとをついてきている。
うん、きっと違うご家族だ。比企谷家にはあんなダンディな人はいません。が
人間いつどうなるか分からない。
少し会わない間にイキって変な風に道を踏み外していなければの話だが、ほんとにそれだけはやめてくれ。頼むから。いやマジで・・・
そんな失礼なことを考えていると電車が到着し、一人の少年（少年と言っても俺と年は大して変わらないが）が降りてきた。
どうやら、先程のご家族はこの少年の迎えに来ていたようだ。
良かったうちじゃなくて・・・

そんなこんなで、向こうのご家族とすれ違いで入ってきた車に叔父さんが乗っていた。
ようやく来たかと重い腰をあげると建長（けんちょう）おじさんが車の窓から顔を出す。
「やぁ！八幡君久しぶり！おっきくなったね！さぁさぁ乗って乗って！」
「なんでそんなに急ぐんですか？」
「そりゃもう歓迎パーティに遅れてしまうからね！家族総出で準備したんだ！楽しみにしてなよ！」
「わざわざパーティとかしなくたっていいじゃないっすか」
「そう文句を言うなよ、そっちの方が上行（うえゆき）や八雲（やくも）も喜ぶ。彼らは随分君のこと慕ってるからね。」
そういう建長の顔は先程までとは打って変わって少し寂しそうな何かを感じさせた。
そこからは、たわいない会話や質問を振られそれに味気なく答えながら新しい家に着いた。

玄関を開けた途端従兄弟で双子の上行（兄）と八雲（妹）がクラッカーを鳴らし出迎えてくれた。変な声を出してしまったのだがクラッカーの音に紛れてくれたのが唯一の救いであった。

もうやだ…　寝よう…

2日目：1

4月12日：雨のち曇り
長い夢を見ていた気がする。
いや、短かったような。
結局忘れてしまったのだから大した夢では無かったのだろう。
目が覚めるとそこには、
「知らない天…　ゲフッ」
おいおいおいおい、なんで横から足が飛んでくるんだよ。
折角某エヴァン何ゲリオンの名台詞を言えるタイミングだったのに。
そう、比企谷八幡は愛しの千葉＆小町の元を離れ、叔父の家に住むことになった。理由は単純、

いじめだ。

カーテンを開けて外を見るとパラパラと雨が降っていた。
思い出したくない嫌なことを洗い流すためにシャワールームへ足を運ぶ。
いじめにあったから転校、というのは珍しいことではない。
むしろそれがいじめられた時に一番最初に出てくる解決策だ。いや、この場合解消策だな。
「戦うのが難しければ逃げていい。君は十分に戦った。」
俺が決意した日に恩師が言った言葉だ。
あの人は俺を最後まで見捨てなかった。俺のことを最後まで認めてくれた。それがとても嬉しくて、自分で新しく戦える場所へ行くことを決意した。ただ、そこに親や妹を連れてこれるわけではない。彼らにも彼らの人間関係がある。俺一人が人間関係で失敗したからと言って他の人、それも家族の人間関係を断ってまでこの逃げるという

行為は行われてはいけないのだ。だから1人で叔父のいるこの町へきた。
一通りの思考を洗い流して風呂を出ると、八雲と上行が起きてきた。相変わらず仲良いな。
よう、とだけ短い挨拶をする。さすがコミュ障。
「おはよう八幡」
さすが双子、声を揃えての挨拶。思わず拍手をするところだった。
「八幡は今日から学校だよね。」
「俺（私）たち、八幡を学校まで案内するよ」
さすがコミュ健、またまた声を揃えてナチュラルに「一緒に登校しよ！キャピ」をしてきた。従兄弟じゃなければ思わず惚れてるところだった。
因みにコミュ健とは、コミュニケーション健常者の略だ。今作った。
無いな。
「朝飯はいつもどうしてる？」
「自分たちで作ってるよ」
「俺たちだって朝練あって朝早いってのに、親共はまだ寝てる。」
「私達がやらないと朝ごはんどころか昼ごはんも無くなっちゃうんだから」
ほう、こいつらはまだ中学生だってのにもう家事という労働を行ってるのか、関心だ。真の専業主夫を目指すものが、労働者に労いの言葉を送らなければただの専業主婦にすらなれない。
「お前らも苦労してんのな、頑張ってるな。偉い偉い…」
お兄ちゃんスキルを発動して頭を撫でる。
小町以外にこのスキルを使うのは久しぶりだな。
「やめろよぉ、俺らもう中学生だぞ？」
恥ずかしがる新しい弟達と会話しながら食卓へ向かう。
今日は転校初日だ。自己紹介のことを考えるととても憂鬱になる。
食器を片付ける手伝いをし、学校に準備をして玄関へ向かう。

この時の俺は、俺が過ごすこの1年がこんなにも間違った青春になるとは思いもしていなかった。

2日目：2

八雲と上行にキリのいいところまで送ってもらった。
学校前の交差点に差し掛かったあたりで、電柱のそばで蹲っている学生とその傍らに自転車が倒れている。きっとスピードを出しすぎて電柱にぶつかったのだろうと予想ができる。
ーー痛そうだな…そっとしておくか…
学校に着くと昇降口の辺りに先生が1人立っていた。右手のそれはなんですかね…
「やぁ、君が転校生の比企谷くんだね？僕は現代文を教えていて、これから君の担任の細井って言います。よろしくね。」
声をかけてきた男は細井と名乗りどうやら俺の担任のようだ。ここは、しっかりと挨拶しておくべきだろう。
「よろしくお願いします。」
よし噛まずに言えた。
聞けば俺のことは、平塚先生から色々聞いているらしい。
右手のそれには触れたくないが、中々ちゃんとした先生なのだろう。
「はぁ、良かった。君が向こうから見えてきた時、写真より目付きが悪かったからてっきり不審者かと思っちゃったけど普通の子っぽくて安心したよ。」
前言撤回、多分ダメな人だ。
細井に連れられて3階の教室に向かう。細いの話が粗方終わると、ドアの向こうから合図を出された。
中に入ると室内が少しザワつく。
そうかそうか、思い描いていたのとは少し違うか。
悪かったな。
フッ…自己紹介か…他の世界線の俺はよく噛んでいるがその知識がある俺は噛まないぞ。
他の世界線ってなんだよ、材木座じゃあるまいし。
「家の事情で千葉から来ました。比企谷八幡です。よろしくお願いし

まッ、します。」
　カンダァアアアアアアアアア
　こうしてまた漆黒の書に新たな記録を記さなくてはならなくなった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「では、今日はここまで。明日から授業があるんで、遅刻しないように。」
　細井がそう言うと、クラスメイトが俺を取り囲む
…なんてことは無かった。
　皆、今年は受験生だ。きっと勉強やらなんやらで忙しいのだろう。かくいう俺も受験生だ。結局1年の付き合い、わざわざ他人と関わらなくたってすぐ終わる関係。そこに本物は無い。全然気にしてなんかないんだからね！
「先生方にお知らせします。」
　スピーカーから割れた音声が流れる。
「只今より、緊急職員会議を行いますので…」
　生徒に待機命令を出した、校内放送は終わり辺りがザワつく。
　どうやら何かあったらしい。
「よう転校生。初日から早く帰れないなんて災難だな。」
　クラスメイトから話しかけられ、それに答える。
「全くだ…早く帰「そんな無愛想だと友達出来ないぞ、ハチ」…ん?!」
　俺は小2から小4のまでの間、親の仕事の都合でこの街に住んでいた。当時から根暗だった俺につるんできた物好きがひとりいた。まさかこいつと再会できるなんてな。
「相変わらず、人前で喋ると噛む癖治ってないんだな。」
　そうこいつは当時1番仲の良かった男（こいつとしか絡んでいなかったのだから1番なのは当たり前だが）子安（こやす）　新（あらた）だった。
「お前、もしかして…誰だ?」
「ひでぇなおい!新だよ!子安　新!」

「久しぶりだな。お前も相変わらず一々大袈裟なのは変わってないんだな、新」

再会を喜んでいると、また校内放送が流れた。

「全校生徒にお知らせします。学区内で事件が発生しました。通学路に警察官が動員されています。できるだけ保護者の方と連絡を取り、落ち着いて、速やかに下校してください。警察官の邪魔をせず寄り道などしないようにしてください。

繰り返し、お知らせします。…」

教室内がさらにざわつく

「事件だってよ。」「見に行ってみるか?」「行こ行こ。」「やっと帰れる」

野次馬になろうとする者、事件に驚く者、やっと帰宅出来ると安堵する者、各々が各々の反応をみせる。

「ハチ、お前はどうする?」

「んあ? 俺か? 俺は帰るぞ。」

「じゃあ、お前に着いていくわ。おじさんちだろ? 一緒に帰ろうぜ。」

また新と2人で帰ることになった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

~帰り道~

神妙な顔つきの新、そして隣を歩く八幡

「そういえば小町ちゃんは来てるのか?」

「いや来てない、挨拶では家の事情とは言ったが、本当は俺の問題だったからな。家族は巻き込めないだろ?」

「お前の問題?」

「あぁ、俺の問題。いつか話したくなったら話すよ。」

「そうか。いつか聞かしたくなったら聞かしてくれ。はぁあ、小町ちゃんは来てないのかぁ…残念だなぁ」

「なんでだ?」

「昔から小町ちゃん可愛かっただろ? 今は……高1か。絶対絶世の美少女になってるだろ。ワンチャン…」

「お前に小町はやらん。ワンチャンもニャンちゃんもねぇよ。」

「チッ、そこまで言わなくたっていいだろ?」

「ブフッ、ははは、はははははは!!」

そこにはお互い笑い会う１０年前と何ら変わらない２人の姿があった。

3日目

4月12日～4月13日

変な夢だ。
そこは青い豪華な部屋、長鼻の男、青い服の女。
そして、窓から見える景色は霧に包まれている。
男は口を開いた。
「ようこそ我がベルベットルームへ。」
知らない場所だ。
「ベルベットルーム？俺はこれから異世界転生でもするのだろうか？」
「おや、お忘れですかな？貴方は一度もう既にこの部屋に来られている。貴方がこの町に来る途中で一度お呼び立て致しております。どうですかな？」
血走った目の男はそういった。
え、この街に来る途中？
この人今そう言ったよね。俺全然覚えていないんだけど。見た目すごい怖そうだしなぁ。もう1回教えてくれるのかなぁ。ダメもとで聞いてみるかぁ。
「すみません。この部屋はなんで、俺は一体どうなるんですか？」
よし聞いたぞ！俺はやってやったぞ！
男は笑顔で答える。
「やはり、お忘れになられたのですな？ここはベルベットルーム。夢と現実、精神と物質の狭間にある部屋。そして貴方は私共のお客様。別に何も致しませぬよ。私共はあなたの旅路のお手伝いをさせていただきます。どう言ったものかはそのうちすぐお分かりになられると思いますぞ。」
「そのうちってなんですか。」
「そのうちはそのうちです。では、約束通りこちらを。」
男が渡してきたのは紙とペン、そして鍵だ。

今まで黙っていた女が口を開く。
「そちらの紙にサインを。鍵の貸し出しの契約書でございます。」
え、過去の俺何をしたんだよ。今の俺がやばい契約しそうになってんじゃねえかよ。
どうしてくれんだ、後で請求とか来たら。
ふざけんな。
「怪しい契約書にはサインをしちゃいけないって母ちゃんに言われてまして…」
「大丈夫、決して損などは致しません。契約内容に目を通して頂ければお分かりいただけると」
契約内容はこうだ。
1つ目、鍵の存在を知られないこと。
2つ目、部屋の存在を知られないこと。
3つ目、鍵は旅の終了時必ず返すこと。
4つ目、旅の中で絆を育むこと。
5つ目、真実に到達すること。
以上の5つだった
夢とは不思議なものでまるで今が現実かのように意外とすんなり理解してしまうものだ。
どうせ夢なのだ、サインをしても変わらない。と俺はサインをした。
「ご契約ありがとうございます。最後に僭越ながらお客様の旅の運勢を占わせて頂きます。」
そう言って男がおもむろに懐から取り出したのはタロットカード。何故占う必要があるのかは分からないが、これでこの夢が終わるんだから占われるしかないだろう。
「お客様の旅路について、過去、現在、未来の3点を占わせて頂きます。まずは過去、悪魔の正位置。こちらは悪魔の囁きによる堕落や誘惑を表しております。お客様は過去に酷い裏切りに遭われたのでしょう。次に現在、隠者の逆位置。こちらは閉鎖的に自分の殻にこもってしまう事を表しております。普段のお客様は人を避けていらっしゃる。

これは過去の出来事が原因かもしれませぬな。では最後に未来を、死神の正位置。これは物事の終わりを表しております。ふむ、何事にも終わりは付き物です。終わる時と言うのは諦めも肝心ですぞ。」
　えぇ、俺最後どうなっちゃうのぉ…だが、
「意外と当たるもんなんですね。未来はともかくとして、過去と現在はあながち間違いでは無いですね。まぁ、俺の夢だし当たり前か。」
　夢というのは記憶の整理作業だとどこかで聞いたことがあある。この占いもきっとそれの一つで、未来に関しても新生活の不安の表れだろう。まさか、俺の頭の中にこんな爺さんと無口な女が居るとは思わなかったがな。
「おや、まだこの部屋が夢だとお思いですか？現実の貴方は深い眠りについておられるが…まぁ、いいでしょう。そのうちお分かりになるはずです。そして占いに関しても、一つ。占いは致しましたが、旅の行く末はお客様の努力次第でございます。お客様が絆を育むことで幾千とも、幾万とも未来は分岐致します。その事を努々お忘れなきようお願い致します。」
　夢ではないと言われつつも気が薄れていくのが分かる。
　そろそろ夢から覚めるのか。
「最後に、申し遅れました。私の名前はイゴール。」
「従者のマーガレットでございます。」
「以後お見知り置きを」
　そうして俺の意識が完全に薄れてなくなった。
　４月１３日：曇
　変な夢を見た。
　そこは少し慣れ始めた新しい自分の部屋で、隣には八雲、反対側には上行。窓の外は曇りだ。
　俺は口を開く。
「知ってる天j…ゲフッ」
　なんでまた起きたら足が飛んでくんだよ。